



P S A T S 会員の方々は Operation Breakthrough という語を懐かしく思い出されるでしょう。1969年にHUDのイニシアチブの下に、官民協力により革新的な住宅生産システムを開発普及させる目的で

スタートしたこのプロジェクトは、住宅生産工業化の草創期にあった当時の日本の関係者にも高い関心を呼びました。鉄鋼、電機などの大手メーカー、セネコン、デベロッパー、ホームビルダー、コンサルタンツなど広い分野から多くの企業が種々の提案を携えて参加しましたが、その華々しいスタートに比べ成果は、総括すれば失敗に終わったと米国でも評価されているように、いま一つはつきりしません。

その30年後の1998年にHUDは「PATH (Partnership for Advancing Technology in Housing) プログラム」をスタートさせます。今度は、住宅産業、メーカー、保険金融業など民間部門相互、公民セクターの連携によって、住宅の耐久性の向上、エネルギー消費削減や再生可能エネルギーの活用とCO2排出削減、水利用の削減、リサイクル材や代替資源の活用、建設作業員の安全性の改善などを目的に、住宅への新しい技術導入を鼓舞するものと

されています。2008年に終了したこのプログラムの成果はインターネットのサイト「PATH-Net」で伺い知ることが出来ます。PATHコンセプトを具体化した二棟のモデル住宅が建設されましたが、これは一見してごく普通の住宅に、平面計画の柔軟性の配慮、断熱性能の向上、新しい技術を活用した設備機器の導入などをPRするものであり、「PATH-Net」上で住宅の供給側とユーザー側双方へ発信されている情報もPATHの目的に沿った新しい技術による製品の利用や設計、施工上の配慮などを促すもの、また各地のホームビルダーが建設したPATHコンセプト技術を導入した住宅例の紹介などです。

アメリカのこの二つのプロジェクトを見比べていると、それぞれの時代背景の違いはあるものの、PATHはより地道で現実的になったと思えますし、また住宅分野における技術革新は、IT産業のように一足飛びではなく、広い住宅関連分野を巻き込み、住文化とか伝統、慣習といったものを引きずりながら、当面する課題に取り組みつつゆっくりと進むものとの認識が必要であり、また日本で戸建プレファブ住宅産業が成長した大きい理由も創業者はじめ関係者達がこの考え方から逸脱しなかったことにあるように思えます。

### その日のために・・・伊藤誠三



数年前、30年来の友人からの便りで、夫人が若年性痴呆症を発症して、介護に手が掛り、もう仕事は続けられなくなった、との辛い知らせがあった。仕事を含め、近況のあれこれを報告しあっていたから、急に交流が行き止まりになったような気がした。暫くして、

漸くデイサービスを受けられるようになって、昼間は少し楽になったので、同様の状況にある人達へのボランティア活動に参加できるようになったと明るい声を聞かせてくれた。自分も大いに助けてもらったからと言う。しかし、夫人の便秘がひどくなり、下剤を使わざるを得ず、排便が不定期でその始末に追われているという。

今年、年初に久しぶりの便りがあった。便秘の件、何か方法は無いのか、と考えているうち、昔、お祖母さんが言っていたことを思い出した。「お通じには糠を食べればよい」と。そこで、煎り糠を作り、ヨーグルトに混ぜて食べさせるようにした所、暫くして、排便は下剤の世話にならなくても良くなった。そればかりでなく、本人も精神的に安定

したのか、気持ちが穏やかになり、笑顔も見せるようになったと、嬉しそうな弾んだ声であった。その詳細を同じ悩みを持つ人たちに公表し、その効果に好評を得ている。更にはその話を聞いて、糠を食べ始めたタクシーの運転手から、長年苦しんでいた便秘から開放されたと言う礼状が届いたのだという。米糠の成分に関するデータも送ってくれた。それによると、米糠に玄米の95%の栄養分(ビタミン、ミネラル類)が含まれているという。一粒の米から出る米ぬかの量に、一粒の米の澱粉を分解するのに丁度良い量のビタミンB群が含まれているのだそうだ。彼の報告で教えられた事は少なくない。単に糠の効用ばかりでなく、同じ問題を抱える人たちとの意見交換、先人の知恵、前向きの姿勢等である。彼は相変わらず明るい。地方に住む彼は東京の情報を欲しがったこともあったが、いまは地元で生き生きと暮らしている。以来、私達夫婦も毎朝、ヨーグルトに煎り糠をトッピングすることになった。以前、この欄に将来、介護を受ける準備について書いたことがあるが、「便通を整えておくこと」を加えることにしたい。